（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

誇り高き歴史

アメリカ合衆国に留学していた時、テレビ・ドラマの〝Roots〟が大きな社会反響を呼び起こしていた。奴隷としてアメリカに連れられた若い黒人の言い伝えから始まる一家族の歴史を、その末裔の一人である作家が語る、という設定になっていた。奴隷制度の非人間的な歴史を振り返るきっかけになっただけではなく、無名の生活をしていたはずの奴隷の家庭にも誇りと思える歴史があるという強いメッセージを社会に発信した。同時に人種を問わず、自分の家族の歴史を調べることは小さなブームを迎えた。

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　8

父と共にルーツ見つけ出す

カルマノ家の紋章

父の趣味なので、気をつけないと、は歴史であり、カルマノ家の歴史も、何人もの親戚の協力を得てまとめた。ドイツ語ができる方はその結果を、詳しい系図とともに、インターネット上でご覧いただける（calmano.de）。名字のCalmanoはイタリア系ドイツ人にKarl Mahnoというような氏名として聞き取られてしまう。（日本に来たら、カルマノは今度は阪急ブレーブスのマルカーノ選手になってしまった）。

ドイツにおけるカルマノ家の最初の史跡はリンブルク大聖堂の洗礼名簿にあるが、1750年10月12日に行われた結婚式の記録である。誕生・洗礼、結婚、死亡など、一生涯の節目を記録するものとして教会の洗礼名簿は今でも暦学者にとって不可欠な資料となっているが、私は父と一緒に、名簿の原本を手にとり最初の記録を見ることができた。その時印象に残ったのは同じページに記されていた死亡事項であった。そのほとんどは生まれて間もない赤ん坊であった。

ミラノ地方から商人としてドイツに移住した最初のカルマノの孫に当たる人は、職人訓練の一環として、いくつかの町のマイスターの下で技術を磨いたあと、父が生まれた町オーベルウルスルで新しい家庭をつくることになったが、前に紹介したアウトバーンのお陰でカルマノ家はまたリンブルクに帰ることができた。しかし、私が11歳の時、リンブルクから25キロメートル離れた、ヴィースバーデン近郊の農村で低価格の宅地を見つけ、念願の自宅を得ることができ、母の誕生日に一家そろって引っ越した。